

第2章 銃後

函館空襲の恐ろしさ

岡田信一さんのお話から

昭和二十年（一九四五年）八月十五日に戦争が終わりました。日本が負けてしまったのです。それまでの四年の間、日本の国は大変なことになっていました。国民はほとんど地獄の生活をしました。本当に苦しい生活をしていたのです。日本人で戦争に行つて死んだ人や爆撃を受けて死んだ人は約三百万人とされています。さらに、戦災、いわゆる戦争で爆撃を受けたり、子どもが一人ぼっちになったりした人が約一千万人です。

○配給制 米や味噌、砂糖などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。

生活はというと、食料が全然なく全部が配給制でした。お米は一人どれぐらいと決められ、お米を買えない人は仕方なく、お芋、麦などを買ってきました。それが一人三つか四つ当たつたらそれで終わりです。それが一日分です。もつとひどかったのは、でんぷんかすで、それは、何日も置かれていられるとおうのです。それを食べたときに「こんなものが食べられるか。」とお母さんに文句を言いました。そうしたら、お母さんは「あなた方はそう言うけれど、今はこれしかないんだよ。」と言いました。それで、お母さんも一生懸命おいしく食べられるように、でんぷんかすを洗って食べさせようとしてくれたものです。

着る物も全部が衣料切符制と言って、切符で買うのです。一人百点あります。例えば、ワイシャツを買うには約十二点です。タオル、ハンカチは三点というふうに点数が決まっています。その他、マッチや石けんなどの物は全部が切符制になりました。

また、今では、いつでもお風呂に入れますが、昔はありません。銭湯と言って、まちにお風呂さんがあるのですが、十人が入ったらいっぱいになるぐらいの大きさです。お風呂に入れ

○予科棟 海軍飛行予科
練習生の略。航空機要員
養成のため、主に少年か
ら志願採用。

ない人もたくさんいました。そうになると、みんなの体は不潔で、汗くさくなり、体にシラミがつかまりました。シラミは暖かくなるとむじむじと動き、かゆくなります。

学校はどうだったかというとき英語の時間はありません。英語を言ったら怒られました。例えば、ベースボールは野球、ピッチャーは投手、キャッチャーは捕手、ファーストは一塁手というふうにやりました。

私は小学生の頃、橋をつくったり、家を建てたりするのは立派だと思って、将来、土木技師や建築士になりたいと考えていました。ところが、他の子たちは「陸軍大將になりました。」「海軍大臣になります。」「予科練になります。」と軍人ばかりが目標でした。友達からは「おまえは何で設計技師になりたいのだ。何でそんなものになりたいのだ。」と言われます。先生は友達を「兵隊さんか。よし、立派だな。国を守るのは男の子だぞ。」と褒めます。先生がそうやって言うので、褒



イメージ図

配給制度

められない私はだんだん小さくなっていく感じがしました。当時、「兵隊になったら戦争に行つて死ぬぞ。」などと言つた先生は、軍隊の警察官に当たる憲兵に連れて行かれて牢屋に入れられてしまうことがあつたので、先生方はいや応なしに戦争に賛成しなければならなかつたのです。

昭和二十年七月十三日「バン、バン、バン。」とすごい音とともに、「ウー、ウー。」とサイレンが鳴りました。空襲警報です。防空壕に入りましたが「バン、バン。」と音がするので、一度防空壕から出て見ると、函館の西の方が焼夷弾をどんどん落され燃えていました。次の日の十四日にお昼ご飯を食堂で食べていると、空襲警報のサイレンがまた鳴り、みんなはうわつと逃げました。窓から見ると、グラマン戦闘機がどんどん私の方に向かってきました。サイレンがまた鳴りました。顔は見えませんでした。パイロットの姿が見えるのです。太陽がむこう

- 防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくつた穴や地下室。
- 焼夷弾 火災を引き起こすために作られた爆弾。
- グラマン戦闘機 アメリカのグラマン社が作った主力艦上戦闘機。



函館空襲

イメージ図

側にありましたから、影絵のようになっていました。そうしているうちに「バンバンバン。」と物すごい音で、私の一メートルぐらいのところに機関銃を撃ってきました。びっくりして心臓がやぶれるんじゃないかと思うくらいでした。田んぼに水が無かったので、そこへ飛び込んで、小さくなれるだけ小さくなりました。「ああ、これが戦争か、おれは戦争は嫌だ、嫌だ、嫌だ。」と思うだけでした。

戦争って嫌だなと思い、軍人になる目標はいつの間になくなり戦争ほど大変なものはないと思いました。空襲が終わったとき、友だちはみんな白い顔をしているのです。「おまえ、どうした。」と言うと、「もう軍人は嫌だ。」と言いました。そして、八月十五日に戦争が終わりました。

その後、私は先生になりました。先生になって、よかったと思うことは、みんなに勉強を教えるということよりも、子どもたちと仲よくなったということです。そして、皆に、「戦争に行くな。行ったら一つしかない命が終わるぞ。命は尊いんだぞ。その命をなくさないように、何でもいから頑張りなさい。」という話をすることができました。

幸せとは何か。戦争をして国を広めることが幸せなのか。戦争をして勢力を高めることが幸せなのか。それは違います。幸せは、毎日近所の人たちと明るく「こんにちは。」と言いつけ合える、そして、日本の国民みんなが楽しく元気で暮らすことだと私は思います。戦争は絶対にだめです。こういう幸せな世の中を続けてほしいと思います。

DATA

平成22年度手稲区平和事業
聴き取り

- ・平成22年11月9日
- ・手稲鉄北小学校



岡田信一(おかだ・しんいち)さん

- ・昭和5年(1930年)生まれ
- ・札幌市手稲区在住